

論 説

アルタン・ハーン以降のモンゴルの
アムド進出とアムド・チベット人
土司のゲルク派への接近
——西寧シナ領主を事例として——

伴 真 一 朗

は じ め に

周知のようにチベット仏教サキャ派の高僧サキャ・パンディタとモンゴルの王族コデンの会見以降、チベット仏教僧とモンゴル王族との間に応供養僧と施主の関係が形成された⁽¹⁾。この関係は大元ウルスの北走以降にモンゴル高原におけるチベット仏教信仰が衰退したことにより一時断絶したとされる。しかしダヤン・ハーンによって再統一されたモンゴルの活動が活発となり、その孫であるアルタン（1507-82、以下アルタン・ハーンとする）がゲルク派の有力化身ラマであったソナムギャムツォ（以下ダライ・ラマ3世とする）と1578年に会見したことが契機となって、モンゴルを施主としゲルク派を応供養僧とするチベット仏教の価値観に基づいた関係が復活し、それがモンゴルやオイラトより分かれた青海ホショト部の支援を受けたダライ・ラマ政権の成立（1642）につながっていく。その際にチベットの東北部にあたるアムド地域に進出したモンゴルや青海ホショト部の活動は、他のカルマ派等の宗派を軍力で押さえてゲルク派をチベットにおける最大の勢力とすることに貢献したために、彼らがチベット史上に果たした役割が顕著であったことが従来の研究によって明らかにされている⁽²⁾。

アムドは地理的に漢地とチベットとの境界に位置する。この時代のアムドには明朝によって土司制度が施行されており、そこに居住するアムド・チベット人⁽³⁾の一部は明朝に土司として従属してい

た⁽⁴⁾。アムド・チベット人の土司や僧侶が明朝とチベットとの政治・経済関係において仲介の役割を果たしていたことは、乙坂(1991)等が明らかにしている⁽⁵⁾。しかしアルタン・ハーン以降にモンゴルがアムドに進出するとともに先住のアムド・チベット人はその圧迫を受けた。明朝、モンゴル、そして中央チベットのゲルク派に比して大きな勢力を持たない存在であるアムド・チベット人がどのように自らの生き残りを計ろうとしたのか。アムド・チベット人の仲介的な役割を重視する従来の研究では注目されていないが、ダライ・ラマ政権が成立した時期における漢地とチベットとの境界地帯の歴史状況を解明することにつながる問題と考える。

本稿ではアルタン・ハーン以降からダライ・ラマ政権の成立までの、明朝、モンゴル、チベット三者間におけるアムド・チベット人領主の動向について、三者の史料にその動向に関する記述がある西寧のシナ (Tib. zi na, Chin. 西納)⁽⁶⁾領主を事例として取り上げて考察したい。第1章ではシナ領主は14世紀後半より土司として明朝に従属したことを述べる。第2章では16世紀後半より右翼モンゴルを中心とするモンゴルの攻撃を受けたことにより、明朝に土司として従属するのみではシナ領主が自己の安全を保てなくなったことを明らかにする。そして第3章ではダライ・ラマ3世以降におけるゲルク派による右翼モンゴルへのチベット仏教布教により、彼らのアムド・チベット人への姿勢が変化したことを明らかにする。第4章ではシナ領主が自らの生き残りを計ってモンゴルに対する宗教的影響力を持つゲルク派に接近したことを明らかにする。

第1章 明朝の土司としてのシナ領主

本論で取り上げるシナ領主については、チベット語史料 DG (part1: 194a4-200a3) にその歴史が述べられた箇所がある。また、張・張(2007: 18-21) が DG と漢文史料等に基づいて概説している。以下それに基づいて述べる。

シナ領主は、古代チベットのトン (Tib. ldong) 氏を起源とし、元来はカムに居住したが中央チベットに移り、モンゴル時代にはアム

ドのツォンカ (Tib. tsong kha) とティカ (Tib. khri kha) 等の支配権を認められたとされる⁽⁷⁾。その後、西寧に本拠を置き、明朝及び清朝が僧侶に授与した国師号の世襲を許され⁽⁸⁾、1427年に建立されたとされるチベット仏教寺院シナ・サムドゥブ寺 (Tib. zi na bsam 'grub gling) を一族によって経営する⁽⁹⁾。モンゴル時代はサキヤ派に従属していたと考えられるが⁽¹⁰⁾、後述するように16世紀の後半よりゲルク派に接近し、DG が成立した1865年ではこの地におけるゲルク派の中心寺院であるクンブム寺⁽¹¹⁾の寺領 (Tib. mchod gzhis) を構成する属民となっている [DG (part1) : 194a4-5]。

20世紀前半にアムドに滞在し同地域の地理や歴史に関する研究を行ったシュラムは、シナー族の国師はナンソ (Tib. nang so) とも呼称され、僧侶であると同時に多くの領民を支配する領主的な存在だったと述べている [Schram1957 : 17-19]。これはチベットで一般的な政治と宗教が一体化した政権であり、叔父甥の血縁によって寺院やその属民の支配権力を世襲させる制度である⁽¹²⁾。その人口は、18世紀前半のものが明確にわかる最も古い数字であるが、1500人程度である [乾隆『西寧府新志』卷19 : 6葉裏]。本稿では寺院の座主とその属民の統治者を兼ね、明朝や清朝からは国師と呼称され、チベット文化圏ではナンソと呼称されたシナの長を便宜的に領主とする。

いまシナ領主が明朝から代々国師号を授与されてきたことを述べた。明朝がアムド・チベット人に施行した統治制度は土司土官制度である⁽¹³⁾。アムドでは武官職を世襲する土司と国師号等の僧職を血縁で継承する僧職土司に大別できる [高1999 : 第3章, 第5章]。シナ領主は通慧浄覚国師号を血縁で継承しているので [張・張2007 : 18], 僧職土司に分類できる。『天下郡国利病書』ではシナ領主が1380年より明朝に従属して演教寺の寺院名がシナ・サムドゥブ寺に与えられたことが述べられている [(19冊, 陝西下) : 72葉裏]。また1419年に西寧衛所属の土司が朝貢してきた中にシナ領主があり [『明太宗実録』卷217 : 永楽17年10月丁酉の条], これ以降も断続的ながら朝貢や襲職の記事を確認できる⁽¹⁴⁾。さらに明朝との茶馬交易を許され、馬匹の納入と引き換えに明朝から茶を供給されたのであ

る⁽¹⁵⁾。

明朝は土司土官制度によってアムド・チベット人を支配しようとしていた。シナ領主はチベット仏教寺院シナ・サムドゥプ寺の経営者である僧職土司として明朝に従属していたのである。しかし明朝によるアムド・チベット人支配は16世紀後半よりはじまるモンゴルのアムド進出によって動揺し、シナ領主もモンゴルの中でも右翼モンゴルに属する勢力によって圧迫をうける。次章ではそれについて述べる。

第2章 右翼モンゴルのアムド進出と

アムド・チベット人への攻撃

大元の正統を名乗ったダヤン・ハーンの子孫はチャハル万戸、ハルハ万戸、ウリヤンハン万戸の左翼とオルドス万戸、トメト万戸、ユンシエブ万戸の右翼に二分され、左翼はモンゴルの正統ハーンを名乗るチャハル万戸が、右翼は「ジノン (Mo. jīnong)」号を有するオルドス万戸がそれぞれの長となった〔江国1986：114-15, 岡田2010：73-78〕。その中で1559年よりアムドに進出・移住したのがトメト万戸のアルタン・ハーンに率いられた右翼モンゴルである〔江国1986：116-117〕。彼らがアムドに進出した理由はこの時代のモンゴルでは王侯の分家が増え、家畜や遊牧地が不足していたためだとされる〔井上2002：257-259, 271-276〕。

さて、アムドに進出した右翼モンゴルは先住者であるアムド・チベット人を攻撃した。モンゴルによるアムド・チベット人への攻撃は16世紀初めのイバライ（系統不明）より始まるが〔李2008：223〕、特に激しかったのは16世紀の後半である。経略尚書鄭洛による「奏設鎮海遊撃疏」においては、モンゴルによるアムド・チベット人への攻撃の代表的な事例として以下のものが挙げられている〔順治『西寧志』（不分卷）：92葉裏-93葉表〕⁽¹⁶⁾。

万曆11（1583）：松虜（オルドス万戸）を初めとする8000余騎が沙塘川より侵入して「蕃夷」1200名を殺傷して馬・駝・牛・羊4000余を略奪する。

万暦14 (1586)：トメト万戸に属するドロシ・トメト部⁽¹⁷⁾の火落赤（ホロチ）を初めとする10000余騎が前川より侵入して「属蕃」500余人を殺傷して牛羊4000余を略奪する。

東
洋

万暦15 (1587)：ホロチが思打壩峽より侵入して馬・騾・牛・羊4000余を略奪する。

学

万暦16 (1588)：瓦剌（オイラト？）5000余騎が南川より侵入して「属蕃」の馬・騾・牛・驢1400余を略奪する。

報

万暦17 (1589)：ホロチに率いられる5000余騎と吉囊（ジノン？）等に率いられる4000余騎が瞿曇寺を包囲する。同寺から牛馬数百を得て包囲を解く。

アムドを攻撃したモンゴルはオルドス万戸やドロシ・トメト部といった右翼モンゴルに属する集団が中心になっていることがわかる⁽¹⁸⁾。また明朝史料中の用語である「蕃夷」は主にアムド・チベット人、「属蕃」はその中でも明朝に従属している集団を指す。瞿曇寺は明朝から寺院名を下賜されたチベット仏教寺院である⁽¹⁹⁾。アムド・チベット人は右翼モンゴルを中心とするモンゴル人によって人命を奪われるほかに、生活の資源である牛・羊や、明朝に茶と引き換えに納める馬を略奪されたのである。

万暦年間の後期（1600年代）にはアムドにおける右翼モンゴルの勢力は明朝の攻撃によって衰えるが、天啓年間のはじめ（1620年代）より同地に進出した左翼モンゴルのハルハ部と結ぶことによって勢力を盛にかえして再び明朝との紛争が起こる〔李2008：184-186〕。例えばドロシ・トメト部のグル・ホシタイジは万暦47（1619）年と天啓7（1627）年に西寧を襲撃して明朝軍と戦っている〔『天下郡国利病書』（19冊、陝西下）：52葉表〕。

では右翼モンゴルの攻撃に対してアムド・チベット人であるシナ領主はどのように対処したのだろうか。万暦23（1595）年には西寧に侵入した右翼モンゴルを明朝が撃退しているが、その時にシナ領主を初めとするアムド・チベット人が明朝側について戦っている。西寧兵備副使劉敏寛の「湟中三捷記」によれば、万暦23（1595）年

第九十七卷

五一四

8月にシナ領主の関係者と考えられる西納・鎖南列息巴が永邵ト(ユンシエブ)⁽²⁰⁾と瓦剌の動向を明朝に報告し、万暦23(1595)年9月には、碾伯等に駐屯する明の正規兵6750人や土兵500人に加えて、シナ領主をはじめとするアムド・チベット兵500人が、1000騎程度と考えられる右翼モンゴルを迎え撃った。この戦いは明朝側が勝利し、500騎前後のモンゴル人が逃走して明朝は681人の首級を得た[順治『西寧志』(不分卷):190葉裏-193葉表]。張問仁の「湟中破虜記」は万暦23(1595)年の9月に西寧で明軍が右翼モンゴルを破った際に略奪された家畜や拉致された人々をアムド・チベット人が取り返したことを記している[順治『西寧志』(不分卷):174葉裏]。アムド・チベット人にとっては明朝の援軍を得ることによって右翼モンゴルに奪われた財産を取り戻すことができたといえる。

しかし、明朝は右翼モンゴルの攻撃から西寧を守るためにアムド・チベット人を利用しようとしていた。万暦36(1608)年には兵部尚書蕭大亨は、御史王基洪による西寧の防備を固める内容の上奏を引用し、虜(モンゴル)に略奪を受けている西番即ちアムド・チベット人を明朝の味方につける事を提案する一文に以下のコメントを付している。

要は衛の西番以て火虜を防ぐに在り。番をして虜と自ら相い讐殺して相合に至らしめざるは、卞莊が刺虎の術、充國が攜羌の計なり⁽²¹⁾。

火虜とはドロン・トメト部のホロチを指す。ここでは二者を相争わせて第三者が漁夫の利を得る『史記』卷70の卞莊子と『漢書』卷69の趙充国の故事を引いて、アムド・チベット人を右翼モンゴルと対立させることを述べている。

そして『天下郡国利病書』は明朝末期までの西寧の防備について述べる。西寧周辺には38箇所の榨があった。榨とは右翼モンゴルの侵入路を指す。明朝は38箇所の榨に27箇所の極衝と11箇所の次衝を設けており、右翼モンゴルの侵入の際には明軍とアムド・チベット人が共同で防衛にあたった[『天下郡国利病書』(19冊, 陝西下):70葉表-裏]。その中の刺撒尓榨極衝の項目は以下のように記述する。

刺撒尔榨極衝は衛治を距だつこと西のかた七十里……虜が零入せば則ち思打隆・西納等族の五蕃營が榨を禦ぎ、西川の兵が賞失加蕃營を出でて、西寧の兵が西納下寺を出でて、北川の兵・白迭溝の兵が車道嶺を出でて分禦す。虜が大入せば則ち諸兵はまた西納寺にて上下合わせて之を撃たしむ〔同（19冊、陝西下）：67葉裏-68葉表〕⁽²²⁾。

ここでは虜（モンゴル）の小規模な侵入の時は明軍が出動するほかにシナ領主をはじめとするアムド・チベット人が刺撒尔榨を守り、大規模な侵入の時は明軍とアムド・チベット兵がシナ領主が経営する寺院である西納寺で迎撃することが述べられている。

乙坂（1991：40-45）が弘化寺を事例として明らかにしているようにアムド・チベット人領主の経営する寺院は明朝の軍事的な拠点とされていた。それはシナ領主にとっては明朝の援軍を得る一方で、明朝の防衛の最前線に位置づけられて軍事的に優勢な右翼モンゴルと直接対峙することを意味していたのである。以上は明朝からの視点によるシナ領主の果たした役割であるが、次章からはモンゴル側及びチベット側の視点からアムド・チベット人の動向を検討することによって、シナ領主の異なる側面を明らかにしたい。

第3章 ゲルク派とモンゴルの応供養僧と

施主の関係の形成と右翼モンゴルの アムド・チベット人政策の変化

前章で述べたように右翼モンゴルは16世紀後半よりアムド・チベット人を盛んに攻撃した。しかし中央チベットのゲルク派がチベット仏教の布教によってモンゴルとの関係を密接にしていく。

15世紀前半にツォンカバによって創始されたゲルク派は、顕密を包括した教義体系が特長であったが、チベット内部の宗派間の抗争の中で宗派の結束を高めるために、当初にはなかった化身ラマ制度をカルマ派に倣って採用した。その早い事例が、ツォンカバの弟子ゲドゥントゥパ（ダライ・ラマ1世、1391-1474）の化身を自称したゲドゥンギャムツォ（ダライ・ラマ2世、1475/76-1542）であり、その

化身としてゲルク派で認められたソナムギャツォ（ダライ・ラマ3世、1543-1588）である〔山口2004：91-92〕。

ソナムギャムツォは1578年にトメト万户のアルタンとアムドのチャプチャルで会見して、互いに称号を授けあい、以後両者はダライ・ラマ及びアルタン・ハーンと呼称されるようになった。これによってモンゴルを施主としダライ・ラマを応供養僧とするかつての元朝におけるモンゴルとチベット仏教との関係が復活した〔石濱・松川2010：105-107〕。そして、ダライ・ラマ4世はアルタン・ハーンの一族より選ばれ、モンゴル人の援助によってモンゴル高原にチベット仏教寺院が建立される〔石濱・松川2010：107-108〕。

こうしてチベット仏教の保護者となったモンゴルの諸勢力が中央チベットのゲルク派とカルマ派の紛争に軍事的に介入していく。トメト万户に属するドロンのトメト部は16世紀後半からアムドに本拠を置くが⁽²³⁾、1603年より1621年においてはゲルク派と結びついてカルマ派の支持者である中央チベットのツァンパと戦っている〔Ahmad1970：99-108、山口1993a,b〕。1634年には左翼モンゴルに属するハルハ万户のチョクトウ・ホンタイジがアムドにおけるドロンのトメト部の勢力を退けてカルマ派と結んだため、後ろ盾を失ったゲルク派はカルマ派に弾圧されるが、ハルハ万户内部のゲルク派を支持する勢力によって壊滅を免れる⁽²⁴⁾。そしてゲルク派の新たな施主となったオイラトの分派である青海ホシヨト部のグーシ・ハーンは1637年にはチョクトウを破り、1642年にはツァンパを滅ぼしてダライ・ラマ政権が成立する〔Ahmad1970：110-144、山口1963〕。かくして青海ホシヨト部の軍事力によってダライ・ラマ政権は成立するのであり、アムドに移住した青海ホシヨト部は1724年まで中央チベットの政局に影響力を持ち続けるのである〔Petech1966、1972：8-112、佐藤1986：第8、第10章、山口2006〕⁽²⁵⁾。

注目すべきはモンゴルの諸勢力が中央チベットの政局に介入するとともに、またチベット仏教のモンゴルへの布教が進むとともに、モンゴルのアムド・チベット人に対する政策が変化することである。

第2章でみたようにドロンのトメト部の首長ホロチは16世紀後半

にはアムド・チベット人に対して略奪を行っており、1587年にはアムド・チベット人の僧侶と考えられる生番の白和尚や西番の祁和尚から家畜を略奪している〔『足本万暦武功録』巻9「火落赤列伝」：19葉裏，22葉裏〕。

しかし、1603年にはホロチはラサに向かうダライ・ラマ4世を迎接しており〔山口1993a：4〕，1625年にはドロン・トメト部の小ラツンやグル・フンタイジはラサを訪問してダライ・ラマ4世の供養塔を建立している〔Ahmad1970：109，山口1993a：11，烏蘭2000：481〕。

そして、1631年にホロチの息子である小ラツンやグル・フンタイジはチョネ・タルカル・チョージェ（Tib. co ne dar khar chos rje）を300人の部下とともに護衛してアムドからラサのダライ・ラマ5世のもとを訪れている〔D5N：66b1-2，山口1993a：11〕。このタルカル・チョージェはチョネ大寺（Tib. co ne dgon chen）の座主として1630年から36年にかけて在任していたジンパダルゲー（Tib. sbyin pa dar rgyas）の弟である〔DG（Part3）：f. 129a2〕。このチョネ大寺は明朝から土司に任じられていたアムド・チベット人であるチョネ領主が経営しているゲルク派寺院である〔DG（Part3）：f. 122a4〕。アムド・チベット人領主の関係者であるチベット仏教僧がラサまで巡礼に赴く際にはドロン・トメト部の護衛を受けていたのである。

次にオルドス万戸の長であったボショクト・ジノン⁽²⁶⁾とシナ領主との関係について述べる。

オルドス万戸はオルドスに本拠を置いたままであったが、アムドに進出したドロン・トメト部と協力してアムド・チベット人や明朝を攻撃していた。ボショクト・ジノンは1585年にドロン・トメト部のホロチとともにアムド・チベット人が居住する洮河や肅州を襲撃した〔『足本万暦武功録』巻14「吉能列伝」：13葉表，烏蘭2000：481〕。また、1587年にはボショクト・ジノンが黄河を渡って明軍を牽制することで、ホロチが明朝領に襲撃するのを援助している〔『足本万暦武功録』巻14「吉能列伝」：13葉裏〕。

その後、ボショクト・ジノンは1596年にアムド出身の僧侶と考えられるグル・ソナムジャルを配下にしてから仏教事業に積極的になっ

たとされ [ET: 86r6-9], 1614年にはダライ・ラマ4世によってモンゴルに派遣されたゲルク派僧侶であるマイダリ・ホトクトを招請して開眼供養を行っている [井上2002: 383-384]。

そして、1623年にはボショクト・ジノンはシナ領主と次のような交渉を持っている。

その後、[ボショクト・ジノンが] 59歳である癸亥の年、アリグのダライ・チオルジに黄金のインクでカンギュル大蔵経を全て筆写させ、カワ・チャガンホトクトに花を撒かせて染め〔る儀式を行い〕、それから西方のツォンカパの地のシナ・ナンソからテンギュル大蔵経を招請する約束をしたが、自身が60歳となった甲子の年に天命の力で上がって行った（亡くなった）⁽²⁷⁾。

本文で「西方のツォンカパの地」と述べられており、ツォンカパの出身はアムドであるため、シナ・ナンソとはシナ領主を指している。ここではボショクト・ジノンがチベット仏教信者としてカンギュル大蔵経（大蔵経仏説部）を金泥で筆写する事業を達成した後、恐らくはテンギュル大蔵経（大蔵経論疏部）の筆写を続いて行う準備のために、アムド・チベット人であるシナ領主からテンギュル大蔵経を入手しようとしていたことを述べている。そしてテンギュル大蔵経は1626年にボショクトの息子であるトバ・タイジのもとに届けられた [ET: 91r4-6]。ボショクト・ジノンははじめはアムド・チベット人に対して攻撃・略奪を行っていたが、チベット仏教の施主になってからは穏健な交渉で必要な物資を入手しようとしていたのである。

このように右翼モンゴルがチベット仏教の施主としての活動を行うにつれて、アムド・チベット人領主に対する政策も攻撃から穏健的なものに変化しており、いずれも經典の招請や巡礼といったチベット仏教に関わるものである。チベット仏教の施主としての活動を行うようになったモンゴル人が、仏・法・僧を尊重するチベット仏教の価値観に従ったことがその背景にあるといっていようだろう。

さらにはオルドス万戸やドロノ・トメト部といった右翼モンゴルへのチベット仏教布教にゲルク派が関わっている事は特筆される。次章では、16世紀後半よりゲルク派がアムドにおいて右翼モンゴル

に布教活動を行い、それにシナ領主も協力したことを明らかにした
い。

第4章 ゲルク派のアムドにおけるモンゴルへの 布教とシナ領主の同派との結びつき

ゲルク派はモンゴルへ進出するのと時期を同じくしてアムドに教
線を拡大している。石濱（2011：111-116）によればアムドのゲルク
派寺院はダライ・ラマ3世の時代に建立されたものが多く、その規
模は中央チベットに次ぐものである。その中の主要な寺院の一つが
1583年にダライ・ラマ3世により学堂の建設が命じられたクンプ
寺（Tib. sku 'bum byams pa gling）である [JKD：10b1-3]⁽²⁸⁾。同寺の僧
侶数は顕教学堂と密教学堂を合わせて1300人以上とされる [GCB：
337]。この寺院はモンゴル人にも信仰されていたようである。例え
ば1639年に左翼モンゴルに属するハルハ部のエルデニ・ホンタイジ
（Tib. er ti ni hung tha'i ji）がクンプ寺にチオルテンを建立している
[JKD：17a6]。

またゲルク派はアムドにおいて寺院の建設だけではなく中央チベッ
トから僧侶を派遣することを行っている。例えばデパ・チョジェ
（Tib. sde pa chos rje）と称されるテンジン・ロサンギャムツォ（Tib.
bstan 'dzin blo bzang rgya mtsho, 1593-1638）がいる。ゲルク派の中央チ
ベットにおける支援者であったキシユツ管領ソナムナムギェル（Tib.
bsod nams rnam rgyal）の末弟で、パンチェン・ラマ4世から教えを授
かった人物であるが [山口1993a：8, 1993b：23]，1618年に中央チベッ
トからアムドに赴きドロソ・トメト部の首長であるホロチの帰依を
受けている [TBN：197]。また1625年にはオールドス万戸のトバ・タ
イジ（Tib. thub pa tha'i ji）にも教えを授けている [TBN：211]。

また、チュサン・ナムギェルベンジョル（Tib. chu bzang rnam rgyal
dpal 'byor）をあげる。チュサンは1578年に中央チベットに生まれ、
同地のゲルク派寺院を遊学した後、ダライ・ラマ及びパンチェン・
ラマの命令でアムドに派遣された [JKD：15b2-16a5]。アムドではト
メト部の建立した寺院で仏教を教えた [JKD：16b1-2]。1634年にク

ンブム寺の第五代座主に就任し、カルマ派と結んだチョクトウの招請を受けた [JKD: 16b5-6]。1637年には青海ホシヨト部のゲーシ・ハーンに仏教を教えた [JKD: 17a3]。1639年から1648年までゴンレン寺の座主を務め [JKD: 17a5-17b2], 74歳で死去する [JKD: 17b4-5]。このようにデバ・チョジェやチュサンといったゲルク派僧侶はアムドにおいてモンゴル人にも布教活動を行ったのである。

ではゲルク派と対立したカルマ派はどうだったのか。1610年から19年にかけて、カルマ派の化身ラマである紅帽派6世法主ガルワン・チュキワンチュクはアムドのシェルコクに赴いてホルツァンの争議を調停している [GB: 136a5, 山口1993a: 4]。しかし、この時期にカルマ派の大規模な寺院がアムドに建立された史実はなく、同派の高僧はアムドよりも雲南の麗江へ布教のために赴いていた⁽²⁹⁾。以上のように、ダライ・ラマ政権の成立した時期においては、カルマ派に比べてゲルク派はアムドへの布教を重要視していたといえる。ゲルク派は青海ホシヨト部やハルハ部の故地にも僧侶を派遣しているが [若松1966, 新藤2013], モンゴルからチベットへの通路であるアムドで布教を行うことによって、同地に進出したモンゴル人の信仰を集めたことも、最終的にゲルク派が彼らを味方にしてカルマ派を押さえてダライ・ラマ政権が成立した要因の一つと考えることは許されるであろう。

そしてシナ領主はダライ・ラマ3世の時代からアムドにおけるゲルク派の支援者として積極的に活動している。ダライ・ラマ3世の伝記によれば1578年にシナ国師 (Tib. zi na gu shri) が100騎の部下とともにアムドに到着したダライ・ラマ3世を出迎えている [D3N: 94a6]⁽³⁰⁾。

また、シナ領主はアムドにおける主要なゲルク派寺院の一つであるクンブム寺の発展に関わっている。1594年にはシナ領主のベンジョルギエルツェン (Tib. dpal 'byor rgyal mtshan) とその後継者のベンジョルリンチェン (Tib. dpal 'byor rin chen) がクンブム寺に護法尊を祭る本堂 (Tib. mgon khang) を建立した [BKD: 45]⁽³¹⁾。また1603年から1612年の間にこの二人は僧侶の集会場 (Tib. 'du khang) も建立して

いる [JKD : 11a6-11b2]。

クンブム寺は先述したようにダライ・ラマ 3 世によって1583年に
学堂を建設する命令が下され [JKD : 10b1-3], 1588年にデュルパ・
チョジェ (Tib. 'dul ba chos rje) によって仏教の講義 (Tib. 'chad nyan)
が開始され [GCB : 337], 1612年に顯教学堂が完成した [JKD : 12a4,
AL : 341]⁽³²⁾。クンブム寺がチベット仏教寺院として成立していく
早い段階からシナ領主はその支援者となっていたのである。

さらに、シナ領主はアムドで布教したゲルク派僧侶の後援者にも
なっている。17世紀前半の事例をあげると以下の通りである。

- (1) 1618年から1624年の間にゲルク派僧侶であるデバ・チョジェ
(Tib. sde pa chos rje) を招請する [TBN : 198]⁽³³⁾。
- (2) 1629年にクンブム寺に招請されたデバ・チョジェより密教の
灌頂を受ける [TBN : 218]。
- (3) 1634年にゲルク派僧侶であるチュサンを招請する [JKD : 16b3-
5]。
- (4) 1649年にはチュサンから金写の般若経を与えられる [JKD : 17
b3]。

これらの事例は数は多いとは言えないものの、その中で (3) の
1634年のチュサンに対する招請は注目すべきである。クンブム寺座
主の伝記集 (JKD) に含まれているチュサンの伝記は次のように述
べる。

それからハルハのチョクトウの軍が青海湖に来たため、クンブ
ム寺の方にいらっしゃった。トムパクという村でシナ・ナンソ
の布施を受けて滞在なさった。シナ・ナンソとその跡継ぎがシ
ナ・サムドゥプ寺の下寺に招請して供応を大に行なった。施
主達が再三にわたって要請したためクンブム寺の座主に就かれた
た⁽³⁴⁾。

チュサンがハルハ万戸のチョクトウ・ホンタイジの軍隊から避難し
てシナ領主に保護されたことの他に、同寺の座主への就任が施主

(Tib. sbyin bdag) の要請によって行われたという記述が興味深い。

(2) ではシナ領主がクンプム寺の施主の代表となってデバ・チョジェから灌頂を受けているので [TBN: 218, JKD: 15a6], クンプム寺の座主へのチュサンの就任についてもシナ領主が関与していたと考えられる。

シナ領主は、その勢力がアムドの全域に及んでいたのではなく、第3章でふれたチベット仏教の宗派間の抗争においてゲルク派に軍事的な支援を行ってもいない。しかし、ダライ・ラマの命令で建立された寺院であるクンプム寺の施設の拡張を援助し、自らが関係する僧侶を同寺の座主として送り出すことで、ゲルク派のアムドにおける布教活動の末端部を担っていたといえる。

注目すべきはシナ領主が後援者となったゲルク派の僧侶はモンゴルの軍事活動に一定の影響を持っていたことである。デバ・チョジェとチュサンはドロン・トメト部のグル・ホントイジがその弟と紛争を起こした時には調停に赴いている [JKD: 16b3]。また1634年にカルマ派を支持するハルハ部のチョクトウ・ホントイジがアムドに侵入した際には

〔チュサン・ナムギエルペンジョルを〕ハルハのチョクトウが招請して供養をなさった。「このラマ(チュサン)とデバ(デバ・チョジェ)の二人は、帽子(宗派)に関わりなく私のラマにふさわしい」と語ったといわれている。チョクトウ主従が尊者リンポチェ(ゲルク派の創始者ツォンカパを指す)の教えを憎んでいるため、この尊者(チュサン)が巧みな方便で喜ばせなされた⁽³⁵⁾。

JKDはクンプム寺の座主であったチュサンが反ゲルク派だったチョクトウと会見して彼を懐柔しようとしたことを述べている。この後にクンプム寺やその近辺に位置するゲルク派のシナ領主が攻撃された史実は無いので、チュサンの説得は一定の効果をあげたとしてよい。アムドで活動するゲルク派僧侶はそのモンゴルの軍事活動を止める影響力を持っていたのである。

以上述べてきたことをまとめる。ゲルク派がモンゴルとの間に応

供養僧と施主の関係を結んだのと同時期に、同派はアムドに進出して、クンブム寺等の同地に建立した寺院や、チュサンやデパ・チョジェといった中央チベットから同地に派遣された僧侶を通じて、モンゴルに対する布教活動を行った。これに対応するようにシナ領主もクンブム寺の施設の拡張を援助し、またチュサンやデパ・チョジェの施主となることでゲルク派のアムド布教の末端部を担ったのである。第3章で明らかにしたようにゲルク派の布教によってモンゴルのアムド・チベット人への政策が軟化し、本章で明らかにしたようにゲルク派僧侶であるチュサンやデパ・チョジェがモンゴルの軍事活動を止める影響力を持っていたことから、モンゴルがアムドに進出した状況下においてゲルク派を味方につけたことはシナ領主にとっては有利であったと考えられる。

お わ り に

本稿ではダライ・ラマ政権成立前後において明朝、チベット、モンゴルといった大勢力に挟まれたアムド・チベット人領主の動向について、明朝の土司であったシナ領主を事例に考察した結果、以下のことが明らかになった。

16世紀後半よりアムドに進出・移住したモンゴルは先住者たるアムド・チベット人を攻撃して家畜等の財産を奪った。アムド・チベット人領主であるシナ領主は明朝の軍事的な支援を受けてこれに対抗しようとしたが、明朝の防衛体制に組み込まれ、モンゴルの攻撃を最初に受ける立場に位置づけられた。ところが、ゲルク派の布教によってチベット仏教の施主となったモンゴルは17世紀前半よりアムド・チベット人の寺院や僧侶に穏健的な姿勢を取るようになった。そしてシナ領主はゲルク派のアムドにおける布教活動の末端部を担うことで、モンゴルの軍事活動を抑止する宗教的影響力を持つ同派と結びついたのである。

かくして明朝、ゲルク派、モンゴルとシナ領主の関係は以下のようになった。

(1) 明朝 …シナ領主は土司としてモンゴルに対する防衛体

制を支える存在。

(2) ゲルク派 …シナ領主はアムドにおける布教の末端部を担う支援者。

(3) 右翼モンゴル…シナ領主とは同じゲルク派の信者としてチベット仏教の価値観を共有する。

シナ領主は(1)のように明朝と軍事的な連携を保つ一方で、(2)(3)のようにゲルク派と右翼モンゴルとの応供養僧と施主の関係を利用することにより、自らの生き残りを計る巧みな外交を行っていたといえる。

アルタン・ハーンとダライ・ラマ3世との会見からダライ・ラマ政権の成立に至るまでの時代はゲルク派を初めとするチベット仏教諸宗派とモンゴルとの間に応供養僧と施主の関係が復活したことから、モンゴルとチベットの関係史において重要な歴史的意義を持つ。しかし、アムドにおいては右翼モンゴルが進出したことにより、明朝の土司制度による秩序が動揺した時期でもあった。このような状況において、アムド・チベット人土司であるシナ領主は中央チベットのゲルク派に近づいた。そして、シナ領主は1647年にラサでダライ・ラマ5世に謁見し [D5N: 137b1], 年代は不明であるがダライ・ラマ6世よりエルテニ・ナンソ (Tib. e rti ni nang so) の称号を授与され [DG (part1): 199a3], ダライ・ラマ政権への従属度を強めていく。ここから本稿が明らかにした事例は、中央チベットのダライ・ラマ政権とアムド地域との政治的な関係とその起源を考察する上でも興味深いと考える。なお、シナ領主がゲルク派やモンゴルと結びつくことを可能にした、明朝及び清朝による土司制度を通じた周縁部支配の実態を明らかにする問題が残るが、それは今後の課題としたい。

参考文献

石濱 裕美子2001『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。

———2011『清朝とチベット仏教——菩薩王となった乾隆帝——』早稲田大学出版部。

- 石濱 裕美子, 松川 節2010「後伝仏教の諸相」沖本克己等編『須弥山の
仏教世界』: pp.50-119, 佼成出版社。
- 池尻 陽子2013『清朝前期のチベット仏教政策——扎薩克喇嘛制度の成立
と展開——』汲古書院。
- 井上 治2002『ホトクタイ=セチェン=ホントイジの研究』風間書房。
- 江國 真美1986「青海モンゴル史の一考察」『東洋学報』67-3・4: pp.113-45。
- 岡田 英弘2004(訳注)『蒙古源流』刀水書房。
- 2010『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店。
- 乙坂 智子1991「明勅建弘化寺考——ある青海ゲルクパ寺院の位相——」
『史峯』6: pp.31-68。
- 1993「ゲルクパ・モンゴルの接近と明朝」『日本西藏学会々報』
39: pp.2-7。
- 佐藤 長1986『中世チベット史研究』同朋舎。
- 新藤 篤史2013「アバタイの「金剛 (včir)」ハーン号と16 世紀末ハルハの
チベット仏教」『大正大学大学院研究論集』37: 156-148 (逆頁)。
- 伴 真一郎2004「三藩の乱におけるチョネ (co ne) 領主の軍事活動——青
海ホショトの動向と関連して——」『日本西藏学会々報』50:
pp.17-30。
- 2005「アムド・チベット仏教寺院ツァン・ゴンパ(瞿曇寺)
のチベット文碑文初考——永楽16年「皇帝勅諭碑」の史的価値
の検討を中心に——」『大谷大学大学院研究紀要』22: pp.189-
219。
- 2006「清朝の青海支配確立期におけるチョネ (Co ne) 領主の役
割とその意義——清朝とテボ (The bo) のチベット人との紛争
をてがかりにして——」『内陸アジア史研究』21: pp.17-31。
- 2012「明初における対モンゴル政策と河西におけるサキャ・パ
ンディタのチオルテン再建——漢文・チベット文対訳碑刻, 宣
徳5年(1430)「重修涼州白塔誌」の歴史的背景——」『アジア・
アフリカ言語文化研究』84: pp.39-65。
- 山口 瑞鳳1963「顧実汗のチベット支配に至る経緯」『典籍論集——岩井博
士古稀記念——』大安: pp.741-773。

- 1992「ダライラマ5世の統治権——活仏シムカンゴンマと管領ノルブの抹殺——」『東洋学報』73-3・4：pp.123-160。
- 1993a「17世紀初頭の青海トゥメト部」『成田山仏教研究所紀要』16：pp.1-26。
- 1993b「17世紀初頭のチベットの抗争と青海モンゴル」『東洋学報』74-1・2：pp.1-25。
- 2004『チベット下（改訂版）』東京大学出版会。
- 2006「第一次ダライラマ政権の崩壊と清朝・青海の関与」『成田山仏教研究所紀要』29：pp.47-99。
- 山田 勅之2011『雲南ナシ族政権の歴史——中華とチベットの狭間で——』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 若松 寛1966「カルムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」『東洋史研究』25-1：pp.92-105。
- 1985「明代内蒙古土默特人の青海地区進出——ホロチーノヤンの事跡——」『京都府立大学学術報告』（人文）37：pp.87-96。
- 和田 清1959『東亜史研究（蒙古篇）』東洋文庫。
- 烏 蘭2000『『蒙古源流』研究』遼寧民族出版社。
- 平 一之（編著）1987『青海民族史入門』青海人民出版社。
- 賈 霄鋒2010『藏区土司制度研究』青海人民出版社。
- 龔 蔭1992『中国土司制度』雲南民族出版社。
- 高 士榮1999『西北土司制度研究』民族出版社。
- 張 羽新・張 双志2007「明朝封贈大崇教寺下寺和西納寺大喇嘛襲職聖旨積統」『中国歴史文物』2007-2：pp.15-21。
- 李 文君2008『明代西海蒙古史研究』中央民族大学出版社。
- 伴 Ahmad, Zahiruddin 1970. *Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Lessing, Ferdinand (ed.) 1960. *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley; Los Angeles: University of California Press.
- Petech, Luciano 1966. "Notes on Tibetan history of the 18th century." *T'oung Pao*, 52: 261-292.
- 1972. *China and Tibet in the early XVIIIth Century: history of the*

- establishment of Chinese protectorate in Tibet*. 2nd. Revised. Leiden: Brill.
- Schram, Louis M. J. 1957. *The Monguors of the Kansu-Tibetan Frontier. Part II: Their Religious Life*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Tuttle, Gray 2010. “Local history in A mdo: the Tsong kha range.” *Asian Highland Perspectives*, 6: 23-97.

参考史料

漢語

- 『漢書』中華書局1962。
- 〔乾隆〕『西寧府新志』（『中国西北文献叢書』第1輯）蘭州古籍書店1990。
- 『史記』中華書局1959。
- 〔順治〕『西寧志』（『中国西北文献叢書』第1輯）蘭州古籍書店1990。
- 『神廟留中奏疏彙要』（『統修四庫全書』史部471冊）上海古籍出版社1995
- 『天下郡國利病書』（『四部叢刊統編』第76冊）臺灣商務印書館1966。
- 『足本万曆武功録』芸文印書館1980。
- 『明経世文編』中華書局1962。
- 『明実録』中央研究院歴史語言研究所1964-1968。

チベット語

- AL: skal ldan rgya tsho (1607-1677). *a mdor bstan pa dar tshul gyi lo rgyud* (アムドの仏教史). 『噶丹嘉措文集』第1冊：341-355. 甘肅民族出版社1999.
- BKD: blo bzang tshul khriims rgya mtsho (1845-1915). *sku 'bum byams pa gling gi gdan rabs don ldan tshangs pa'i dbyangs snyan* (クンブム寺歴代座主の伝記・新). 青海民族出版社1982.
- DG: brag dgon dkon mchog bstan pa rab rgyas (1801-1866). *deb ther rgya mtsho* (アムドの仏教史). New Delhi: Lokesh Chandra, ed., 1975-77 (Śata-Piṭaka-Series).
- D3N: ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682). *rje btsun thams cad mkhyen pa bsod nams rgya mtsho'i rnam thar dngos grub rgya mtsho'i shing rta* (ダライ・ラマ3世の伝記). *The Collected Works of the fifth Dalai lama*,

- vol. 8. Gangtok: Sikkim Research Institute of Tibetology, 1991-1995.
- D5N: ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682). *za hor gyi ban de ngag dbang blo bzang rgya mtsho'i 'di snang 'khrul pa'i rol rtse rtoqs brjod kyi tshul du bkod pa du ku la'i gos bzang* (ダライ・ラマ5世の自伝). *The Collected Works of the fifth Dalai lama*, vol. 5-6. Sikkim Research Institute of Tibetology, 1991-1995.
- GB: si tu pan chen chos khi 'byung gnas (1699/1700-1774). 'be lo tshe dbang kun khyab (?-?). *sgrub brgyud karma kam tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba* (カルマ・カギユ派高僧伝), vol. 2. New Delhi: D. Gyaltsan and Kesang Legshay, ed., 1972.
- GCB: sde srid sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705). *dga' ldan chos 'byung bai dūrya ser po* (ゲルク派の歴史). 中国藏学出版社1989.
- JKD : 'jam dbyang bzhad pa dkon mchog 'jig med dbang po (1728-1791). *kham s gsum chos kyi rgyal po tshong kha ba chen po'i 'khrung gnas gdan sa chen po sku 'bum byams pa gling gi gdan rabs mu tig 'brang pa* (クンブム寺歴代座主の伝記・旧). *The Collected Works of dkon mchogs 'jigs med dbang po*, vol. 2. New Delhi: Ngawang Gelek Demo, 1971.
- TBN: skal ldan rgya tsho (1607-1677). *rgyal ba'i dbang bo sde ba chos kyi rje bstan 'dzin blo bzang rgya mstho dpal bzang bo'i rnam par thar pa dad pa'i sgo 'byed* (テンジンロサンギャムツォの伝記). 『夏爾・噶丹嘉措文集』第1冊：180-255. 甘肅民族出版社1999.
- モンゴル語
- ET: *Erdeni-yin tobci* ('precious summary'): *a Mongolian Chronicle of 1662*. Canberra: Faculty of Asian Studies, Australian National University 1990.

註

- (1) 仏教においては供養される対象である出家僧を「応供僧」、供養する人間を「施主」と呼ぶ。チベット仏教の価値観においては、転輪聖王と認められた俗人の王侯は施主となって高僧を招請して供養し、仏法と衆生のための政治を行うことが求められる [石濱2011：2-6]。

- (2) 彼らのダライ・ラマ政権の成立と存続に果たした役割については山口 (1963, 1992, 1993a, 1993b, 2006), 佐藤 (1986), 石濱 (2001), 井上 (2002), Petech (1966, 1972), Ahmad (1970) を参照。
- (3) アムドとは現在の青海省, 甘肅省, 四川省東北部のチベット人居住地域を指す。漢から唐の時代にかけては羌族が居住していたが [牟1987: 1-2], 吐蕃の版図となってからはチベット人が進出し, 先住の諸集団の一部も彼らが吸収したとされる [牟1987: 8-9]。吐蕃の崩壊以降のアムドでは領主や彼らと一体化した寺院が分立した。本論ではこの集団をアムド・チベット人と呼称する。
- (4) アムド・チベット人土司についての研究は, 龔 (1992), 高 (1999), 賈 (2010), Schram (1957) 等がある。
- (5) 明朝及び清朝とチベット・モンゴルとの関係においてアムド・チベット人の仲介としての役割を明らかにした研究としては乙坂 (1991) の他に伴 (2004, 2006, 2012), 池尻 (2013), Tuttle (2010) がある。
- (6) 現在の西寧の近辺に本拠を置いていた。シナとは父系氏族 (Tib. rus) の呼称である [DG (Part1): 196a4]。漢語では「西納」と表記される [張・張2007: 18]。
- (7) DG ではシナ一族がアムドに移った時期を述べていないが, 張・張2007: 18は宋代からアムドで活動していたことを『宋史』等の漢文史料から明らかにしている。
- (8) 明朝による国師号の世襲を許可する史料として「万曆44 (1616) 年9月23日, 通慧淨覚国師・班着爾領真 (Tib. dpal 'byor rin chen) 宛て漢文・チベット文勅諭」がある [張・張2007: 図版]。なお, シナ領主は僧侶であるため国師号は叔父から甥に相続した。
- (9) DG (Part1: 198a1-3) によればシナのラマであるチョパクギェルツェン (Tib. chos 'phags rgyal mtshan) が宣徳 (Tib. zon te) 2 (1427) 年に建立したとされる。
- (10) DG によれば, シナの一族はサキャ派で仏教を学んでいた [Part1: 196a6-196b1]。
- (11) クンブム寺については第4章で後述する。
- (12) 佐藤 (1986: 359-362) では中央チベットのバクモドゥパの, 賈

- (2010：276-278) ではカムのムリ (Tib. mu li, Chin. 木里) 領主の政権構造について述べる。細部では異なっているが、僧侶が政権の長となり後継者をその血縁者から選んでいる点は共通している。
- (13) 土司土官制度とは中国王朝が西部・西南部の非漢族統治のために用いた制度である。非漢族の首長に土司または土官と称する世襲の官職を授与し、現地の統治を委任する間接支配の制度である。土司土官制度の概要については龔 (1992) を参照。
- (14) 宣徳 9 (1434) 年の朝貢の時は西納等族指揮列即答兒となっており武官職である [『明宣宗実録』 卷115, 宣徳 9 年12月乙丑の条]。しかし、成化 8 (1472) 年に演教寺妙智広慧刺麻阿節爾の後継者である端約藏トに襲職を命じる記事がある [『明憲宗実録』 卷100, 成化 8 年正月乙卯の条]。刺麻は明朝がチベット仏教僧に与えた法号の一つであるため [佐藤 1986：295], 僧職土司である。しかし、いつから僧職土司に変わったのかは今後の課題である。
- (15) アムド・チベット人と明朝の茶馬貿易については高 (1999：123-133) が概説している。シナ領主が茶馬交易に必要な金牌を明朝から交付されたことを述べる記事は管見の限りでは見いだせなかったが、同領主は従属下にある部族とともに明朝に馬を納めていたので [『天下郡国利病書』 (19冊, 陝西下)：72葉裏-73葉表], 茶馬交易を許されていたと考えてよい。
- (16) 「奏設鎮海遊撃疏」は『明経世文編』や『明実録』に管見の限りでは見いだせなかったが、順治『西寧志』に収録されている略述を用いた。
- (17) ドロン・トメト部はトメト万户に属する一オトク (Mo. otog) である [江國 1986：118]。
- (18) 1580年代から90年代にかけて右翼モンゴルとともにアムドに進出した瓦剌がいわゆるドルベン・オイラトとどのような関係にあるのかは江國 (1986) も考証しておらず不明。
- (19) 瞿曇寺については伴 (2005) を参照。
- (20) アムドに進出した永邵トはユンシエブ万户中の一オトクであるバルフ部である [江國 1986：134]。
- (21) 要在衛西番以防火虜。令番與虜自相讐殺而不至於相合, 卞莊刺虎之

- 術，充國撫羌之計也。[「巡閱事竣聞見頗真敬陳切要事」(万曆36年3月20日簫大享奏)『神廟留中奏疏彙要』(兵部9卷)：17葉裏]。
- (22) 刺撒尔桦極衝距衛治西七十里……虜零入則思打隆・西納等族五蕃營禦樺，西川兵出賞失加蕃營，西寧兵出于西納下寺，北川兵・乩迭溝兵出車道嶺分禦。虜大入則諸兵又于西納寺上下合擊之。[『天下郡國利病書』(19冊，陝西下)：67葉裏-68葉表]。
- (23) ドロン・トメト部のホロチがアムドで活動を始めたことにより，1592年前後にはアムドを代表する勢力に成長する [江國1986：118-120，134-140]。
- (24) 1635年にチョクトウの長子アルサランはゲルク派を壊滅させるために軍勢を率いて中央チベットへ向かうが，翻意してゲルク派の支持者となりダライ・ラマ5世に謁見した。その後にアルサランはチョクトウに謀殺されたという [山口1963：748-749]。
- (25) 右翼モンゴルや青海ホショト部がダライ・ラマ政権成立時にゲルク派の施主となった歴史的経過については山口(1963，1993a，1993b)が詳しく述べているが，その原因については実証しておらず依然として不明のままである。恐らくはゲルク派の教義や政略，第4章で述べる同派の布教の方法等の複数の要因が重なっていると考えられる。
- (26) ポショクト・ジノンはダヤン・ハーンの三男バルスボラドの子孫である [井上2002：524-525]。
- (27) tegünü qoyina tabin yisün-iyer *güi* yaqai jile: Arig dalai corji-bar altan Bkanjur-i bicigüljü tegüsken: Lkaba cayan qutuy-tu-bar seceg sacuyulju büitügedeg: tendece barayun eteged Bzongkaba-yin oron-u Sina nangso-aca Bstanjur-i jalaqui aman abun atala: jiran nasun-iyen: ga quluyuna jile jayayan-u erkeber ögede bolbai [ET：87v08-15]. 「aman abun」については Lessing (1960：1) が「To promise」，烏蘭 (2000：466) と岡田 (2004：302) が「約束」と訳しているのでそれに従う。
- (28) 現在の西寧付近にある。恐らく1560年と考えられるが，修行者であるリンチェン・ツォントウギャムツォ (Tib. rin chen brtson 'grus rgya mtsho) によって小規模な寺院が建立されたのが始まりである [JKD：9b6-10a]。
- (29) この時期のカルマ派は麗江の土司である木氏への布教に重点を置いて

ていた。1581年から1621年にかけてカルマ派の高僧が木氏と接触する回数が急増している [山田2011：118-119]。ガルワン・チュキワンチュクも1621年に木氏政権によって行われた麗江版カンギュルの開版にも経典の貸与や法会の主催というかたちで関わっている [山田2011：119-120]。

- (30) DG (part1：196a4-200a3)にあるシナ領主に関する項目では、モンゴル時代におけるサキヤ派との関係、それ以降の明朝及び清朝との関係、16世紀後半のダライ・ラマ3世の時代からのゲルク派との関係について詳述している。DG (part1：198b3)にはツォンカパの弟子であるトクデンジャンベルギャムツォ (Tib. rtogs ldan 'jam dpal rgya mtsho, 1356-1428) がシナ領主のもとでシェーゴ (Tib. zhal ngo) という役職に就いていたことが述べられているが、それ以降はダライ・ラマ3世の時代に至るまではゲルク派については述べられていないことから、ダライ・ラマ3世以前のシナ領主とゲルク派との関係は長期にわたって継続していなかったと考えられる。
- (31) このベンジョルリンチェンは万暦44 (1616) 年に明朝から通慧浄覚国師号を授かった班着爾領真 (Tib. dpal 'byor rin chen) である [張・張2007：図版3]。
- (32) D3Nには、ダライ・ラマ3世が1581年から1584年の間に [D3N：100b5-102b3]、クンプムを訪問して学堂 (Tib. bshad grwa) を設けたことが述べられているが [D3N：102a5-6]、顕教学堂が完成したのが1612年なのでダライ・ラマ3世の時点では簡単な施設のみが作られたと考えられる。
- (33) TBN (196-197) にはデバ・チョジェが1618年にカルマパの支援者であったツァンパの軍を避けてアムドに逃れたことが記されている。その後の記事に年は暫く記されておらず、次に記載されている年はTBN (203) にある1624年である。
- (34) de nas hal ha chog thu'i dmag mtsho khar 'ongs pa'i rkyen gyis nang phyogs su phebs / dom bag ces bya ba'i grong du zi na nang sos sbyin bdag mdzad nas bzhugs / zi na nang so khu dbon gyis lha khang 'og mar spyang drangs te bkur ste phun tshogs pa mdzad / sbyin bdag rnams kyis yang dang yang du gsol ba btabs la brten nas sku 'bum gyi khri par phebs [JKD：16b3-5].
- (35) hal ha chog thus gdan drangs nas bsten bkur mdzad / bla ma 'di dang sde

ba zhabs drung gnyis zhwa ma gtogs bdag gi bla mar 'os 'dug ces smras skad
/ chog thu dpon blon rje rin po che'i bstan pa la bsdang bar brten / rje 'dis thabs
mkhas gyis khong rnams mgu bar mdzad / [JKD : 16b5-6].

東
洋
學
報

(大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員)

第
九
十
七
卷

四
九
四

The Mongolian Advance into Amdo from the Reign of Altan Qayan and
the Rapprochement between Local Amdo Tibetan Native Officials and
the Dalai Lama's Gelukpa Sect:

The Case of the Lords of Zina 西納 in Xi'ning 西寧

BAN Shin'ichiro

This article examines the relations between Mongols and Tibetans during the first half of the 17th century, focusing on the lords of Zina 西納, a clan of Amdo Tibetans surrounded by the three forces of Ming dynasty, Central Tibetans, and Mongols.

From the reign of Altan Qayan (1507-82) on, the Right wing of Mongols, which have migrated to the Amdo region in northwestern Tibet, formed monk-patron relations with the Gelukpa Sect of Tibetan Buddhism and contributed to the formation of the Dalai-Lama Administration in Central Tibet.

Since Amdo was situated on the border with China, the Ming Dynasty had established there in the 14th century as native officials *tusi* 土司 by Ming dynasty of indirect rule through local chieftains, including the lords of Zina. The Right wing of Mongols who advanced into Amdo attacked the indigenous Tibetan population and seized their herds.

The lords (*tusi*) of Zina fended the Mongols off with military assistance from the Ming Dynasty and thus formed China's frontline of defense against the Mongols. On the other hand, once having pledged their patronage to the Gelukpa Sect, the Mongols assumed an attitude of peace towards the lords of Zina, who were also followers of Tibetan Buddhism, and were converted to the Gelukpa Sect.

Then the lords of Zina grew closer to the Gelukpa Sect which had religious influence among the Right wing of Mongols, and lent it economic assistance in its missionary activities in the Amdo region.

By maintaining their military alliance with the Ming Dynasty and utilizing the monk-patron relationship between the Mongols and the Gelukpa Sect, the lords of Zina conducted a triangulated policy of diplomacy that guaranteed their survival.

Within the Mongols advance into the Amdo region, the activities of the

lords of Zina, who formed links with the Gelukpa Sect in Central Tibet, offer the historian an extremely interesting case when considering the origins of the relations between Amdo and central Tibet after the formation of Dalai-Lama Administration.